

婉曲的表現方法とその遵守

——『伊勢物語』を統一体として読むことの必要性——

田 口 尚 幸

I 序

前稿「陰影をおぼめかす表現方法——『伊勢物語』を統一体として読むことの可能性——」（愛知教育大学大学院国語研究）平26・3）では、『伊勢』の婉曲的に表現する側面に注目し、二九・五九・六六・八二・八三・八五・九一・一二四段の〈陰影をおぼめかす表現方法〉を明らかにした。その統稿たる本稿では、〈陰影をおぼめかす表現方法〉という婉曲的表現方法を確認した前稿につづき、婉曲的表現方法とその遵守を広く確認し、統一体『伊勢』のさらなる婉曲的側面を種々紹介する。そして、そうした婉曲的側面が見られるがゆえに『伊勢』を統一体として読む必要がある、と述べる。

具体的には、次節で、六六・六八・八七段に関し、〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉を見る。前稿

でもとりあげた六六段を切り口として、同様な婉曲的表現方法が六八・八七段にもあることを確認する。

〈人物の明確な紹介を避ける臆化〉とその踏襲を見る次々節では、基幹章段〔注1〕↓類話章段〔注2〕といった時間軸を導入し、まず、基幹章段の婉曲的表現方法を前例として類話章段も婉曲的表現方法を遵守している、ということを確認する。基幹章段としてとりあげるのは二条后関係の四段で、相手が二条后であることを暗示する基幹章段四段の歌前部暗示型、すなわち、〈人物の明確な紹介を避ける臆化〉が〔注3〕、類話章段二六・六五段にも踏襲されているところを見る。次に、基幹章段が二条后関係・惟喬関係であることを明示する歌前部明示型なのに類話章段が歌前部暗示型になっている例として、二九段および八五段をとりあげる。基幹章段↓類話章段という括りに縛られることなく、大局的に、〈人物の明

確な紹介を避ける「隲化」とその踏襲を見、婉曲的表現方法とその遵守を確認しようと思う。

Ⅳ節では、斎宮章段群六九～七四段をとりあげる〔注4〕。基幹章段六九段↓各類話章段七〇・七一・七二・七三・七四段〔注5〕、という時間軸もあるが、注目するのは、類話章段七〇～七四段内の、基幹章段から近い類話章段↓遠い類話章段という時間軸である〔注6〕。七〇段より七一段、七一段より七二段、七二段より七三段、七三段より七四段において、六九段との直結感は、隲化あるいは一般化〔注7〕によって弱められる。七一段に〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉を見、婉曲的表現方法を確認した上で、七二～七四段に〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉の踏襲を見て、婉曲的表現方法が遵守されていることを確認したい。

一〇三段をとりあげるⅤ節では、塗籠本『伊勢』に見る一次本文↓広本『伊勢』段に見る二次本文↓定家本『伊勢』に見る三次本文、といった時間軸を導入する。そして、一〇三段の前後に位置する一〇二・一〇四段にも注目し、一次本文の頃から前後章段に見られた〈裏返し表現で推測させる暗号化〉が、三次本文の頃になってまんなかの一〇三段に踏襲されるところを見る。諸本の比較から、書写者兼編作者による婉曲的表現方法とその遵守が垣間見えることもある。それを、最後に確認する。

〈人物の明確な紹介を避ける隲化〉、〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉、〈裏返し表現で推測させる暗号化〉、および、それらの踏襲。「伊勢物語」を統一体として読むことの可能性」という副題の前稿に比して強調したいのは、基幹章段↓類話章段、基幹章段から近い類話章段↓遠い類話章段、一二次本文↓三次本文、といった時間軸を導入し〔注8〕、そうした時間軸のなかで婉曲的表現方法とその遵守を確認する点である。副題を前稿の「伊勢物語」を統一体として読むことの可能性」から「伊勢物語」を統一体として読むことの可能性」に変えたのは、右のような婉曲的表現方法とその遵守が確認できれば、統一体『伊勢』を読む可能性を超えて必要性まで説ける、と考えたからである。前稿および次節までの婉曲的表現方法の確認といったレベルを、次々節以降で超え、婉曲的表現方法とその遵守の確認をとおして、統一体『伊勢』を読む必要性を説いていきたい。

諸章段の成立事情が一樣でなく編集も不徹底な『伊勢』の場合、不統一性の方に目が向くのは仕方ないところがある。しかし、その不統一性は、『伊勢』を統一体として読むことの必要性を否定するものではない。『伊勢』を統一体として読めることは、既に拙著『伊勢物語相補論』平15・9おうふう一五～二七八頁に示した。不統一な諸章段も、成立の早遅に縛られない同一平面上でつなぎ得るし、『伊勢』は、一人の昔男の一代記として読むことができる。諸章段の成立の

早速に注目して不統一性に合理的説明を与えようとする立場とは異なる『注9』、『伊勢』を統一体として読む立場は、必要不可欠と考える。

注1 基幹章段とは、『古今集』業平歌章段で二条后藤原高子章段群

三〇六段の基幹となる四・五段、『古今』業平歌章段で斎宮章段群六九〇七四段の基幹となる六九段、『古今』業平歌章段で惟喬親王章段群八二・八三・八五段の基幹となる八二・八三段などをさす。同じく、『古今』業平歌章段の七六段も、二九段に対して基幹となっているため、基幹章段と見なす。

2 類話章段とは、基幹章段に対する敷衍的性格が認められる章段であり、それらは、業平と無関係な他人の歌をもとに成立しているものであったり（歌の素性を調べるには渡辺実『集成』巻末「附録」が至便）、短小なものであったりする。

3 次々節でとりあげる松田喜好「二条后物語」章段の後人注について（『伊勢物語攷 第二』平6・6笠間書院）によれば、四段は相手が二条后であることが「僅かに見えてくる」章段であり、ゆえに、二条后関係であることを歌後部で注記することが「不必要」であったという。領ける指摘である。なお、校本を見ると、広本『伊勢』のなかには「二条の後とぞ」という歌後部注記をもつものもあるが、これは説明のための後世的加筆と思われる。歌後部注記型は原初的でないと考えられる（片桐洋一『全説解』も「付加」とする）。よって、四段は、歌前部暗示型としておく。

4 昔男が都女に伊勢移住をもち掛けて拒まれる七五段は、斎宮章段群に含めないものとする。

5 福井貞助『伊勢物語生成論（増補版）』昭60・1バルトス社五〇二・五〇三頁によると、塗籠本『伊勢』では、定家本『伊勢』とちがって、七二段が七五段の後にくる。広本『伊勢』も、同様なものが多い。しかし、七二段は、七〇段より後、七四段より前にあるべきと考えられる。既に渡辺『集成』が七二・七四段のところを

指摘しているとおり、七〇段「大淀」を踏まえて七二段「大淀」があり、七二段「恨み」を踏まえて七四段「恨み」がある。とすれば、ここは、七〇段→七一段→七二段→七三段→七四段という定家本『伊勢』の段序を原初的と見なくてはならない。

6 七〇の七四段は、一人の人物による一回的成立かもしれないし、何人か人物による何段階かに渡る成立かもしれない。前者とすれば、基幹章段から近い類話章段→遠い類話章段という時間軸は短くなるし、後者とすれば、長くなる。ただ、いずれにせよ、七〇段→七一段→七二段→七三段→七四段という先後関係は成り立つわけで、基幹章段から近い類話章段→遠い類話章段という時間軸が存在する点は動かない。

7 既に佐藤裕子「伊勢物語『斎宮物語』の形成」（『国文学研究』昭58・6）は、七二段について、

七二段作者が、六九段の別れの場面を、一般的男女の別れとして享受してしまった

——中略——

七二段には、作者の六九段に対する自己流の解釈によって、六九段からの一般化が見られる

と述べ、七三段については、

七三段は六九段の場面設定を何一つ具体的にうけてはおらず、不特定の男女における身分差のある恋を一般的に描いている。そこで、六九段の特定男女の恋から、一般男女の身分差のある恋へという物語世界の移行がみられる

と述べて、七四段についても、

七四段は、逢瀬のままならない状況で男が女を恨むという、一般的男女の恋の一面を描く

——中略——

内容的に、七二段よりさらに一般化されていると述べている。要するに、佐藤は、七二・七四段に関し、真に、一般的な話とるのであるが、私は、あくまで、基幹章段六九段とのつながりを前提とした、臘化の方法としての一般化があるとする。佐

藤説との相違点を、予め断っておく。

8 そうした時間軸を導入しても、成立過程を説くことを主眼とするわけではない。そこから婉曲的表現方法とその遵守すなわち統一化を述べ、結局は、統一体としての現『伊勢』をあるがままに読む立場に帰結する。

9 『伊勢』の成長増益を説こうとする先行研究の限界性は、拙著『相補論』七・三三頁で概括的に示した。

Ⅱ 〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉

六六段は、〈陰影をおぼめかす表現方法〉を論じた前稿の、「歌前部をオブラートに包む婉曲的表現方法」と題する節でとりあげた。

昔、男、津の国に領るところありけるに、兄、弟、友達率ゐて、難波の方に行きけり。渚を見れば、舟どもものあるを見て、

難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟

これをあはれがりて、人々帰りにけり。

という内容で、歌意は次のとおり。

難波の港を今朝「見つ」すなわち見ましたが、その「御津（難波港の別名）」の浦ごとに、「海」を渡る舟が見えます。これがまあ、この世を「憂み」つつ渡る舟なのでしょうか。

対応する『後撰集』一二四四番歌の詞書は、

身の憂へはべりける時、摂津の国にまかりて住みはじめはべりけるに

『西本願寺本業平集』五四番歌の詞書は、

身の憂へはべし時、津の国須磨の浦といふところに住みはじめはべりける日

『在中将集』七九番歌の詞書は、

身の憂へはべりける時、津の国蘆屋の里に住みける頃、難波にまかりて

『雅平本業平集』三二番歌の詞書は、

世のなか心憂かりし頃、津の国の住吉の浜にて、舟の浮きたるを

と各々なっていて、「憂へ」か「心憂かり」を必ず含んでいる。一方、六六段歌前部にはその種の情報が全くなく、歌後部に「これをおはれがりて、人々帰りにけり」とあるのみで、婉曲的である。前稿では、そこから、六六段の〈陰影をおぼめかす表現方法〉を指摘したのであった。

ただし、六六段には、婉曲的表現方法という点で、注目すべきところがまだある。歌の前を見ると、共感によって結ばれているはずの「兄、弟、友達」Ⅱ仲間が登場し、たとえば秋山虔『新大系』が、

舟影をわが憂愁の喩として表現する

と述べる昔男の歌の後に、仲間の感応が簡潔に示される。「舟

影をわが憂愁の喩として表現する」歌意が仲間に伝わり、ゆえに「あはれが」った感じ入ったと考えられるが〔注10〕、重要なのは、仲間の感応を以て歌の質量を補説する間接性、場の情感を以心伝的に推測させる仲間の沈黙であろう（「あはれがりて」直後に「人々帰りにけり」がきて、ほかに何も示されないところから、仲間の沈黙を読む）。この間接性と沈黙すなわち（仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化）は〔注11〕、〔後撰〕にも『業平集』三系統にもない、『伊勢』特有の婉曲的表現方法である。六六段の婉曲的表現方法を言うのであれば、ここまで言うべきであったと思われる。

〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉は、六八段にも見られる。六六段と同じく畿内を仲間「思ふどち」と「逍遙」する六七段の後には、六八段がくる（拙著『相補論』二〇六頁で、六六〜六八段収録歌に関し、「三首とも、『うみ』憂みあるいは『憂し』の語が共通している。薄暗い色調だ。諦観にもとづく憂情が漂う」と述べているので、六六〜六八段のつながりという点で参照されたい。）。

昔、男、和泉の国へ行きけり。住吉の郡、住吉の里、住吉の浜を行くに、いとおもしろければ、降り居つつ行く。ある人、「住吉の浜と詠め」と言ふ。

雁鳴きて菊の花咲く秋はあれど春のうみ辺に住よし
の浜

と詠めりければ、みな人々、詠まずなりにけり。
という内容で、歌を訳せば、

雁が鳴いて菊の花が咲く秋は確かに良いのですが、春の
「住吉」の浜を「憂み」つつ行く私としては、「海」辺に
「住み良し」といったところでず。

となる。歌前部「ある人」および歌後部「みな人々」は、共感によつて結ばれた仲間であることが明確でないものの、六六・六七段とのつながりからすれば、六八段にそうした仲間の同行を読める。また、歌後部「詠まずなりにけり」も、六六段歌後部同様、昔男の歌に感じ入って沈黙したと読むべきであろう。従つて、仲間の感応を以て歌の質量を補説する間接性、および、場の情感を以心伝的に推測させる仲間の沈黙があるところから、〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉が言える。

ちなみに、六七段には『在中将集』三四番歌・『雅平本業平集』四〇番歌が対応し、六八段には『西本願寺本業平集』四三・『在中将集』六七・『雅平本業平集』四一番歌が対応するが、各詞書（およびそれらに前後する歌の詞書）からは、共感によつて結ばれた仲間の同行までは読みとれない（『西本願寺本業平集』四三番歌とその前後歌には詞書がない）。加えて、歌後部自体ないため、当然、歌に対する仲間の感応も沈黙もない。六六段同様、六八段の間接性と沈黙すなわち〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉も、『伊

『勢』特有の婉曲的表現方法と言える。

八七段にも、〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉は見られる。第一部歌前部を見ると、兄の衛府督や同僚の衛府佐たちといった仲間が登場する。昔男はしがない「なま宮仕へ」をしており、衛府督である兄も第一部一首目で露骨に嘆いているから、仲間も満ち足りていないはずで、彼らが共感によって結ばれていることは明らかである。そして、そんな彼らは、歌後部において感応する。兄の一首目の嘆きもたらしめた深刻な空気に対し、機転を利かせた昔男が、抜き乱る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖の狭き

に

という笑える二首目で払拭し、兄を思う優しさを見せる。そして、その後に、

片方の人、笑ふことにやありけむ、この歌にめでてやみにけり。

と、仲間が感応する。かなり補って訳せば、

周囲の人々は、大きな滝と小さな袖がアンバランスで、兄の深刻な歌から一転して拍子抜けするこの歌を、おかしいと思ったのでしょうか。そして、そうやって深刻な空気を払拭した男の機転と、兄を思う優しさを褒めて、自分たちは歌を詠むのを控えたのです。

となろう「注12」。まず、仲間の感応を以て歌の質量を補説する間接性は、ある（「笑」って「めで」という仲間の感

応がなければ、歌の質量に気づけない可能性大である）。そして、場の情感を以心伝心的に推測させる仲間の沈黙も、「やみにけり」とあるとおり、ある。よって、〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉が言える。

ちなみに、八七段第一部は、『古今』では九二三番歌、『西本願寺本業平集』では三四番歌、『在中将集』では五九番歌、『雅平本業平集』では二八一・二九番歌が対応するが、それらの詞書から共感によって結ばれた仲間の同行までは読みとれないし、仲間の感応や沈黙を示す歌後部もない。八七段の間接性と沈黙すなわち〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉も、『伊勢』特有の婉曲的表現方法という点で、六六・六八段と共通する。

以上、六六・六八・八七段には〈仲間の沈黙を以て場の情感を推測させる以心伝心化〉が見られ、婉曲的表現方法を確認することができた。こうした婉曲的側面から、私は、『伊勢』を統一体として読むことの可能性を感じる。

注10 「あはれが」るには、気の毒に思ったり悲しく思ったりする意もあるが、感じ入る意で訳す注釈書ばかりで、私も同感である。

11 仲間の感応を以て歌の質量を補説する間接性に関しては、九段第一・三部歌後部も、仲間の涙によって昔男の歌の質量を補説していると考えられるが、場の情感を以心伝心的に推測させる仲間の沈黙は該当しない。

12 八七段の解釈に関しては、拙著『相補論』二九五～三〇五頁参照。歌の訳は、拙著『伊勢物語入門 ミヤビとイロゴノミの昔男一代記』

Ⅲ 〈人物の明確な紹介を避ける臃化〉とその踏襲

前稿および前節までと異なり、本節以降では、様々な時間軸を導入する。本節において導入するのは基幹章段↓類話章段という時間軸であるが、はじめに、基幹章段の婉曲的表現方法を前例として類話章段も婉曲的表現方法を遵守するありようを確認する。本節以降では、婉曲的表現方法の確認というレベルを超えて、婉曲的表現方法とその遵守の確認というレベルにまで達したい。

二条后関係の基幹章段↓類話章段に、注目しよう。二条后関係の章段は「[注13]」、

基幹章段四・五段↓類話章段三・六・二六・六五段

基幹章段七六段↓類話章段二九段

と分類でき、さらに、二条后の紹介の仕方から、

歌前部明示型…七六段

歌前部暗示型…四・二六・二九「[注14]・六五」[注15]段

歌後部注記型…三「[注16]・五」[注17]・六段

といった分類もできる。本節では、このうちの基幹章段四段↓類話章段二六・六五段をとりあげ、〈人物の明確な紹介を避ける臃化〉とその踏襲を見、婉曲的表現方法とその遵守を確認

認する。

基幹章段四段は、次に示すように、相手が二条后であることを歌前部で暗示し、歌後部でも相手が二条后であることを注記しない。

昔、東の五条に、大后宮おはしましける西の対に、住む人ありけり。それを、本意にはあらで心ざし深かりける人、行き訪ひけるを、正月の十日ばかりのほどにほかに隠れにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべきところにもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。またの年の正月に、梅の花盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月の傾くまで伏せりて、去年を思ひ出でて詠める。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして

と詠みて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

この四段は、注3にあげた松田の指摘どおり、相手が二条后であることをかろうじて読みとれる章段で、松田は次のように述べている。

四段には後人注がない。ただこの段の描き方を、三段と比較するならば実に暗示的な描き方である。三段で「懸想じける女」を二条后高子とするには後人注が必要で

あったが、四段では、三段と同じ視点から読めば、二條后高子の姿が僅かながら映し出されてくる仕掛けになっているのである。同じ視点とは、業平を主人公にして読むということである。主人公を在原業平に仮託すれば、「東の五條に太后の宮おはしましける」と描かれる「太后の宮」とは、仁明天皇の女御・文徳天皇の后（母親）・清和天皇の太后（祖母）の藤原順子のこととなる。本文の描き方からすれば清和天皇の即位以後を踏えた物語の舞台が設定されていると考えられる。この太后の順子と関係付けて深よみをすれば、「西の對に住む人（女）」が、清和天皇の女御となつた藤原高子の姿が僅かに見えてくるように、物語は描かれていく。それは「それを本意にはあらず、心ざしふかゝりける人（業平）、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつゝ、なむありける。」この辺のよみから高子が浮かび上がつて来る仕掛けとなっている。

——中略——

この物語の主人公を在原業平に仮託し、そこに描かれた世界の背景を想像を逞しくして探つて読めば、業平が恋をした女性が高子であつたという描き方になっているのである。もともと伊勢物語はこのような読み方が許され

た、否、要求されている作品だつたものと思われる

——中略——

この四段には、三段に付加されたような後人注は不必要ということになる。

領ける指摘であり、とすれば、歌前部暗示型の四段には（人物の明確な紹介を避ける醜化）が見られるわけで、婉曲的表現方法を確認できる。

では、基幹章段四段の（人物の明確な紹介を避ける醜化）婉曲的表現方法は、その類話章段においても踏襲し遵守されているのであろうか。基幹章段四・五段の類話章段には三・六・二六・六五段があるが、このうち歌後部注記型の三・六段は、（人物の明確な紹介を避ける醜化）が見られないため、除外する「注18」。すると、残るは、二六・六五段となる。

二六段は、

昔、男、「五条わたりなりける女をえ得ずなりにけること」とわびたりける人の返りに、

思ほえず袖にみなとの騒ぐかな唐土船の寄りしばかりに

という内容である。四段と同じ歌前部暗示型で、歌後部はない。相手が二条后であることは、明示でも注記でもなく、暗示されている。なお、「男」と「人」の関係については、「男」が「五条わたりなる女をえ得ずなりにけること」と「人」に嘆く↓その「人」から慰めの手紙がくる↓それに対し「男」

が「思ほえず」歌を返す、と読む渡辺『集成』の説に従う。また、歌についても、

思いがけなく、袖に港の波が騒ぎ立つことよ、異国の舟が寄つて来たばかりに

と訳し、

愛する女を奪った男を「唐土舟」に譬え、愛の破綻を嘆いた歌。

と注する、渡辺『集成』の説をあげておく。

さて、この二六段は、四段（および五段）をどう踏まえているのであろうか。いくつかの共通性が目につく。「五条わたり」は、四・五段における二条后の居所「東の五条」「東の五条わたり」を踏まえていようし、「唐土船の寄りしばかりに」は、四段「ほかに隠れにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべきところにもあらざりければ」を踏まえていよう。四段で「人の行き通」えない「ほか」へ移されたのは、入内と読むのが妥当と思われるが〔注19〕（二条后が至上の清和天皇のもとに移され、昔男ごときは手出しできなくなった、と読む）、それを踏まえたのが「唐土船の寄りしばかりに」と考えられる。「五条わたりなる女」をめぐる恋のライバルは清和天皇をさしていようし、日中間を往来する大船「唐土船」は強大な清和天皇の比喩として似つかわしい。そんな「唐土船」、すなわち、愛する女を奪った清和天皇があらわれたというのであるから、ライバル清和天皇に比しての劣位とい

う四段の内容を二六段が踏まえていることがわかる。そして、それら以上に注目すべきなのが、（人物の明確な紹介を避ける體化）の踏襲と思われる。相手が二条后であることを暗示する四段の歌前部暗示型は、二六段でも踏襲されている。二六段が歌前部明示型でも歌後部注記型でもなく歌前部暗示型になっているのは、四段の婉曲的表現方法を前例として二六段も婉曲的表現方法を遵守したからにほかなるまい。加えて、婉曲的ということ言えば、ライバル清和天皇に比しての劣位は、四段でも二六段でも暗示的である。兩段とも、ライバル清和天皇の存在や彼に比しての劣位は明示せず、あくまで暗示に徹している。こちら、四段の婉曲的表現方法を前例とした二六段の婉曲的表現方法の遵守を確認できる。

六五段に目を移そう。その冒頭は、

昔、公思して使う給ふ女の、色許されたるありけり。大御息所とていますかりけるいとこなりけり。

ではじまって、末尾は、

水尾の御時なるべし。大御息所も染殿の後なり。五条の後とも。

という注記で終わり、『伊勢』中最長の六五段に「二条の後」の語は出てこない。「大御息所とていますかりけるいとこ」は藤原明子の従妹という設定から二条后と読みとれるようになっていて、末尾の注記も、二条后に関するものではない。二条后の紹介の仕方で分類すれば、相手が二条后であること

をかううじて読みとれる歌前部暗示型となる。内容は破滅的なもので、ライバル清和天皇に比しての劣位も示されるし、昔男が「流し遣は」されたり、二条后が「蔵に籠め」られたりして、逢瀬の障害も示される。

この六五段も、二六段が四段（および五段）を踏まえているように、四段（および五段）を踏まえており、いくつかの共通性が見られる。逢瀬の障害という点は、四・五段を踏まえていようし、ライバル清和天皇に比しての劣位という点は、四段を踏まえていよう。四・五段には、二条后が常人の近づけない「ほか」へ移されたり、昔男が「通ひ路」に番人を置かれたりする障害があり、六五段にも、昔男に対する流刑や二条后に対する監禁といった障害がある。また、ライバル清和天皇に比しての劣位に関しては、四段と六五段では劣位の示し方が暗示的／明示的というちがいがああるものの、劣位を示すところは共通する。そして、それら以上に注目したいのが、二六段と同じく、〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉の踏襲と言える【注20】。六五段は、相手が二条后であることを暗示する四段の歌前部暗示型Ⅱ「人物の明確な紹介を避ける醜化」を踏襲しており、四段の婉曲的表現方法を前例とした六五段の婉曲的表現方法の遵守を確認できるのである【注21】。

つづいて、基幹章段が二条后関係・惟喬関係であることを明示する歌前部明示型なのに類話章段は歌前部暗示型になっ

ている、七六段↓二九段および八二・八三段↓八五段に注目する。これらは、基幹章段四段↓類話章段二六・六五段の場合とちがひ、基幹章段の歌前部暗示型を類話章段が踏襲するかたちになっていない。従って、基幹章段↓類話章段における〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉とその踏襲、あるいは、基幹章段の婉曲的表現方法を前例とした類話章段の婉曲的表現方法の遵守を、言うことはできない。けれども、昔男が在原業平であることを徹底して醜化する『伊勢』において〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉は普遍的パターンであり、そうした普遍的パターンの踏襲と見れば、基幹章段が歌前部明示型であっても、基幹章段↓類話章段という括りに縛られないで、大局的に、〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉の踏襲あるいは婉曲的表現方法の遵守が言える。

基幹章段七六段↓類話章段二九段の場合から見よう。二九段が七六段を踏まえていることは、次の点からわかる。七六段には「春宮の御息所」、二九段には「春宮の女御」なる語があつて、共通する。そして、二条后がそうした存在になつてしまったことを昔男が嘆くところも、共通する。七六段では、昔男の歌の後にくる、

心にも悲しと思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。
というヒントによってわかるし、前稿で述べたとおり、二九段における昔男の歌には、「裏の真意」として、「今は『東宮の女御』になつてしまひ、遂に結ばれなかつた二条后に対す

る、ままたらぬ逢瀬を恨む『嘆き』がある。二九段は、七六段を踏まえていよう。ただし、七六段→二九段の場合は、基幹章段の歌前部暗示型を類話章段が踏襲するかたちになっていない点が、四段→二六・六五段の場合と異なる。七六段は、歌前部に「二条の后」という語をもつ歌前部暗示型であり（対応する『古今』八七一番歌の詞書も「二条の后の」ではじまるところから察すると、原資料の段階から「二条の后」なる語があったと考えられる〔注22〕）、対する二九段は、

昔、東宮の女御の御方の花の賀に召し預けられたりけるに、

花に飽かぬ嘆きはいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし

となっていて、「二条の后」なる語がない。〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉は七六段に見られず、二九段にのみ見られるため、ここは、昔男が在原業平であることを徹底して醜化する普遍的パターンを二九段が踏襲した、と見たい。大局的に、〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉の踏襲あるいは婉曲的表現方法の遵守が言えるわけである。

同じことは、惟喬関係の基幹章段八二・八三段→類話章段八五段の場合にも当てはまる。「惟喬の親王」といった語を有する歌前部暗示型の八二・八三段に対し、八五段は、「童より仕うまつりける君」とだけ紹介する歌前部暗示型であり、基幹章段の歌前部暗示型を類話章段が踏襲するかたちになっ

ていない。〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉は八二・八三段に見られず、八五段にのみ見られるから、ここも、昔男に關し徹底して醜化する普遍的パターンの踏襲と見よう。やはり、大局的に、〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉の踏襲あるいは婉曲的表現方法の遵守が言えるのである。

以上、まず、四段→二六・六五段について、〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉とその踏襲を見、婉曲的表現方法とその遵守を確認した。次に、二九・八五段について、大局的に、〈人物の明確な紹介を避ける醜化〉とその踏襲を見、婉曲的表現方法とその遵守を確認した。こうした婉曲的側面からは、『伊勢』を統一体として読むことの可能性ならぬ必要性を思わずにはいられない。

注13

「二条の后に仕」える「男」と「女」の話である九五段は、二条后が話の中心にこない。よって、二条后関係に含めない。

注14

塗籠本『伊勢』は二条后関係であることを明示する歌前部暗示型になるが、これは説明のための後世的加筆と考えられる。歌前部暗示型は、原初的ではあるまい（片桐『全説解』も「注釈的書き加え」としている）。

注15

広本『伊勢』のなかには、「大御息所」を「五条の后」とする最末尾の注記のところで（後述）、五条后＝藤原順子に加え二条后を併記するものがある。しかし、「大御息所」を二条后とするのは誤りなので（そもそも五条后とすること自体誤り）、二条后を併記する歌後部注記型が原初的とは思えない。

注16

塗籠本『伊勢』は、歌後部注記型なのは変わりないものの、二条后とせず、五条后としている。けれども、昔男の相手は二条后でな

ければならず、五条后とするのは後世的改変（改悪）と言える。

17 塗籠本『伊勢』は、二条后関係であることをあらわす歌後部注記をもたず、歌前部暗示型となる。対応する『古今』六三二番歌の詞書も相手が二条后であることを明示しないため、塗籠本『伊勢』の歌前部暗示型が原初的である可能性も考え得る。ただし、注16で述べたとおり、塗籠本『伊勢』では前々段の歌後部注記が五条后となっており（前段は歌前部暗示型）、その流れで、二条后関係であることを注記する歌後部を削除した可能性もまた考えられる（片桐『全読解』は、塗籠本『伊勢』に歌後部注記がないことに關し、「一見合理的な本文のようにも思えるが、実はそうではない」とするものの、その理由はわからなかった）。また、広本『伊勢』の歌後部注記のなかには、二条后とせずに五条后としているものが多い。昔男が五条后のもとに寄寓する二条后に逢いに行つたから、「五条の后に忍びて参りけるを」となっているのであろうか。しかし、二条后章段群というまとまりを考えれば、二条后とあるべきで、五条后とあるのが原初的とは思えない（片桐『全読解』も、「五条の後の宮殿」説でとれなくはないとしながら、結局は「おかしい」としている）。塗籠本『伊勢』の歌前部暗示型だけは気になるけれど、ここは、二条后関係の歌語部注記型としておく（仮に塗籠本『伊勢』の歌前部暗示型が原初的であっても、それで本節の私見が揺らぐことはない）。

18 松田によると、三段は、二条后関係であることと注記する歌後部がなければ二条后関係となり得たか「疑問」な章段であり、六段は、二条后関係として読むにはそれを注記する歌後部が必要であった」という。首肯できよう。つまり、三・六段は、二条后とかけ離れた歌前部ゆえに歌後部注記型にせざるを得ず、歌前部暗示型の二・六・五段とは区別すべきと思われるのである。

19 「入内」の語を明記する注釈書には、森野宗明『講談社文庫』・石田稷二『角川文庫』・中野幸一『旺文社文庫』・鈴木日出夫『評解』などがある。ちなみに、三段末尾には、

二条の後の、まだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人にておはし

ましける時のことなり。

とあり、そこからつなぎ読めば、三段で「帝」に「仕」える道筋が予告されていたことになって、四段の入内へとスムーズにつながる。もっとも、四段で入内したと読むと、六段末尾「まだい」と若うて后のただにおはしける時とや」と合わなくなるが（「ただ人」↓入内から再度「ただ」に戻ってしまう）、そこは成立事情の異なり起因する不統一と見て、目をつむるほかない。たとえば、東下り関係の七・九段における八段は、順路としておかしくても、それも含めてつなぐのが『伊勢』の読み方なのであって、二条后章段群三・六段も同様に読みたい。

20 片桐『全読解』も、六五段が後世的なのに「二条の后」の語をもたない点には気づいており、次のように述べる。

「二条の后」という名を示さなくても、読者は、女主人公が二条の後であるとして享受するはずだということを前提にしているから、むしろそれをそのまま表面に出さずに、物語としてアレンジして語りあげている。

しかし、人物の明確な紹介を避ける「臆化」の踏襲というところにはまでは踏み込んでいない。

21 六五段は、業平と無関係な他人の歌をもとに成立した後世的な類話章段であり、昔男が在原業平であることを伏せる『伊勢』にあつて「在原なりける男」と紹介する点からも、後世的な印象を受ける。そして、その紹介は、相手が二条后であることを暗示する婉曲的表現方法とは、方向性が逆である。ただし、諸章段を成立の早遅に縛られない同一平面上でつなぎ読むには、「在原なりける男」という特例的呼称が必要とされた文脈上の理由を考えるべきであり、そうした文脈上の理由については拙著『入門』九六頁で述べている（類例と言える六三段「在五中将」の文脈上の理由についても、同書八八頁で述べた）。

22 この点は、四・五段に対応する『古今』七四七・六三二番歌の詞書と異なる。それらには、「二条の后」という語がない。

IV 〈基幹章段との直結感を弱める離化あるいは一般化〉とその踏襲

本節でとりあげる斎宮章段群六九〇七四段は、長大な六九段の後に短小な七〇〇七四段が連なり、六九段↓七〇段、六九段↓七一段、六九段↓七二段、六九段↓七三段、六九段↓七四段といった基幹章段↓各類話章段の時間軸が認められるのであるが、注目すべきは、類話章段七〇〇七四段内の、基幹章段から近い類話章段↓遠い類話章段という時間軸である。七〇〇七四段を見ると、七〇段より七一段、七一段より七二段、七二段より七三段、七三段より七四段において、六九段との直結感は弱められる。具体的には、離化あるいは一般化によって、弱められていく。本節では、類話章段段内の基幹章段から近い類話章段↓遠い類話章段という時間軸に沿って、七〇段に対する七一段の〈基幹章段との直結感を弱める離化あるいは一般化〉を見るとともに、七一段に対する七二段の〈基幹章段との直結感を弱める離化あるいは一般化〉の踏襲、七二段に対する七三段の〈基幹章段との直結感を弱める離化あるいは一般化〉の踏襲、七三段に対する七四段の〈基幹章段との直結感を弱める離化あるいは一般化〉の踏襲を見る。それは、七一段における婉曲的表現方法を確認した上で、七二〇七四段における婉曲的表現方法の遵守を確認する、ということの意味する。

はじめに、七〇〇七四段の本文を、まとめて示しておく。
七〇段。

昔、男、狩の使より帰り来けるに、大淀の渡りに宿りて、斎宮の童部に言ひ掛けける。

みるめ刈る方やいづこぞ棹さして我に教へよ海人の釣舟

七一段。

昔、男、伊勢の斎宮に内の御使にて参れりければ、かの宮に好きこと言ひける女、私事にて、

ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに

男、

恋しくは来ても見よしかしちはやぶる神の禁むる道ならなくに

七二段。

昔、男、伊勢の国なりける女、またえ逢はで隣の国へ行くとして、いみじう恨みければ、女、

大淀のまつは辛くもあらなくにうらみてのみもかへる波かな

七三段。

昔、そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女のあたりを思ひける。

目には見て手にはとられぬ月のうちの桂のごとき君

にぞありける
七四段。

男、女をいたう恨みて、

岩根踏み重なる山にあらねども逢はぬ日多く恋ひ渡るかな

では、太い傍線を付した七〇段と細い傍線を付した七一段から比較していこう。

七〇段には、「齋宮」とあり、昔男が「狩の使」であると示される。基幹章段である六九段の「齋宮」「狩の使」を、そのまま踏まえているのであろう。また、「齋宮の童部」は、六九段で齋宮が昔男のもとに「小さき童を先に立てて」訪れた際の「童」と同一視＝限定できる。もちろん、齋宮に仕える「童」「童部」はほかにもいよう。しかし、昔男の「みるめ刈る」歌は、齋宮に「見る目（逢う機会）」がありそのような場所を「童部」に尋ねる内容であるから、この「童部」は、六九段の密通の場にいた「童」ととらねばなるまい。七〇段は、六九段と共通する「狩の使」「齋宮の童部」から、六九段と直結するつながりを二本有すると言える。

一方、七一段になると、七〇段で「齋宮」「狩の使」とあったのが、「伊勢の齋宮に内の御使にて」となる【注23】。注目すべきは、六九段「狩の使」と同一視＝限定できた「狩の使」が「内の御使」に隲化＝一般化され、やや同一視＝限定しづらくなる点である。「狩の使」からわかる六九段との直結感

に比べ、「内の御使」からわかるそれがやや弱いことを、おさえておこう。注目したい点は、まだある。齋宮に仕える好色めいたことを言ってきた女をさす「かの宮に好き」と言ひける女」は、七〇段「齋宮の童部」とちがひ、六九段の誰かと同一視＝限定できない。もっとも、渡辺『集成』が、

六十九段の敷衍であることは、女の側に男を訪ねる意志を置いて語る点にも表れている。

と述べるような共通性はあり、その点ではつながるが、この「女」に関しては、齋宮ならぬ齋宮に仕える女房とする注釈書ばかりで、拙著『相補論』一三二頁でも、「齋宮に仕える女房らしき女」ととっている。「かの宮に好き」と言ひける女」は、「女の側に男を訪ねる意志を置いて語る点」で六九段とつながるものの、主体のすり替えがあつて、六九段の登場人物と同一視＝限定できず、その点で隲化されている（齋宮を一般化したのが「女」ではないので、隲化＝一般化と言わず、ただ隲化と言う）。彼女からわかる六九段との直結感は、弱い。六九段と直結するつながりを二本有する七〇段に対し、隲化あるいは一般化がなされる七一段には、六九段との直結感がやや弱いつながりと弱いつながりの二本しかない。七〇段に対し、七一段には、（基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化）が見られる。まずは、七一段の婉曲的表現方法を確認できた。

次は、七一段と波線の傍線を付した七二段を比較する。

七一段を振り返ろう。「伊勢の斎宮」への「内の御使」は、斎宮への勅使である点は六九段と変わらなかったから、そこからわかる六九段との直結感、やや弱い程度であった。また、「かの宮に好き」と言ひける女」からわかる六九段との直結感も、弱いとは言え、「かの宮」＝「伊勢の斎宮」からつながりがわかったし、「女の側に男を訪ねる意志を置いて語」っている「好き」と言ひける女」からもつながりがわかった。

対する七二段には、「大淀」の地を歌に詠む「伊勢の国なりける女」が登場する。彼女は、昔男が「またえ逢はで隣の国へ行く」相手でもある。要注目なのは、七一段にあった「斎宮」の語がなくなる点である。斎宮の地を含む「伊勢の国」とあろうと、斎宮の地に近い「大淀」を詠んでいようと、そして、相手の昔男が「またえ逢はで隣の国へ行く」と（後述）、それらは隲化＝一般化されたヒントであるため、彼女に関しては、六九段の斎宮との同一視＝限定がかなりしづら。七二段が斎宮章段群に含まれることを考え併せると、彼女は斎宮とするほかあるまいが〔注24〕、隲化＝一般化がなされていて、彼女からわかる六九段との直結感、かなり弱いものになっている。しかも、その歌は、六九段を踏まえず、七〇段を踏まえており〔注25〕、昔男が「恨」んでいることを詠むところは、七二段オリジナルである。このことも、六九段との直結感はかなり弱いものにする一因となつていよ

う。さらに、彼女に「またえ逢はで隣の国へ行く」昔男にも、注目したい。七一段にあった「斎宮」「使」の語がないせいで、六九段「狩の使」との同一視＝限定はかなりしづらい。確かに、渡辺「集成」が、

六十九段の敷衍であることは、「またえ逢はで、隣の国へ」から明白。再び逢う機会を作ってくれなかったと、男が女を恨むのも、逢い難い斎宮が相手なら真実味をもつ。

と指摘するとおり、「またえ逢はで隣の国へ行く」ところから、「もはら逢ひごとくもえせで、明ければ尾張の国へ発ちなむとす」る「六十九段の敷衍」は言えるけれど、六九段にあった「尾張の国」の語はなく、同一視＝限定に導くヒントとしては今一步である。「斎宮」「使」および「尾張の国」の語をなくすことは隲化＝一般化であり、「またえ逢はで隣の国へ行く」昔男からわかる六九段との直結感も、かなり弱い。

七一段の〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉＝婉曲的表現方法は、七二段においても踏襲＝遵守されている。その踏襲＝遵守とは、前段の隲化あるいは一般化の上にまた隲化＝一般化を重ねることであるから、七一段でやや弱いか弱かった程度の六九段との直結感、七一段でかなり弱くなるわけである。

つづいては、七二段と点線の傍線を付した七三段の比較。

七二段を振り返ると、六九段との直結感はかなり弱いと言つても、斎宮ととり得る「女」には「伊勢の国なりける」

と付されていたし、彼女は斎宮の地に近い「大淀」を詠んでいた。昔男が「またえ逢はで隣の国へ行く」相手でもあった。

ところが、七三段になると、七二段にあった、斎宮と取るためのいくつかのヒントはなくなる（もちろん「斎宮」の語もない）。よつて、「そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女」を六九段の斎宮と同一視＝限定することは、甚だしづらくなる。かろうじて手を出し難い「女」という点にヒントになり得るものの、それとて、同一視＝限定に導くヒントとして見ると、七二段のヒントに比して、質・量ともマイナス方向に振つてある。事実、そのわかりにくさゆえ、二条后を思い浮かべる注釈書すらあるほどである〔注26〕。七二段の「女」同様、七三段が斎宮章段群に含まれることを考え併せれば、彼女は斎宮ととらざるを得まいが、ヒントの質・量をマイナス方向に振る隲化＝一般化の影響は大きい。「そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女」からわかる六九段との直結感が甚だ弱いことを、おさえておこう。七二段の〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉＝婉曲的表現方法は、七三段でも踏襲＝遵守される。前段の隲化＝一般化の上にまた隲化＝一般化を重ねることで、六九段との直結感は質的に変化し、七二段でかなり弱かったものが、七三段で甚だ弱いものになる。また、六九段とのつながりの量も、七二段の二本（「大淀」を詠む「伊勢の国なりける女」および彼女に「またえ逢はで隣の国へ行く」昔男）

から、七三段の一本（そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女）に減じるのである。

最後は、七三段と傍点を付した七四段を比較したい。

七三段では、手を出し難い「女」という点に、甚だ弱い六九段との直結感を見出すことができた。

それに対し、七四段はどうか。昔男に「逢はぬ日多く恋ひ渡るかな」と詠まれる「女」からわかる六九段との直結感は、甚だ弱いどころか、ほぼ皆無になる。そもそも、彼女の場合、七二段「伊勢の国なりける女」や七三段「そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女」と異なり、「女」の前に何の情報も付されていない。もつとも、渡辺『集成』が、この歌を説明するのに「女をいたうらみて」だけというのは、あまり簡単にすぎるであろう。だがこれは七十二段の「いみじうらみければ」や七十三段の「消息をだにいふべくもあらぬ」などに連なるものであろう。つまりこれも斎宮諸段の一つであり、背後に六十九段がひかえているゆえに、この短い説明で十分とされ得たと指摘するとおり（注5でも触れた）、七四段は七二段「いみじう恨みければ」や七三段「消息をだに言ふべくもあらぬ」を踏まえているのであるが、七二段における昔男の「恨み」は、六九段を踏まえていなかったし、七三段「そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女」からわかる六九段との直結感も、甚だ弱かった。要するに、七四段が七二段を踏

まえていようと、六九段までは廻り得ず、かろうじて、接触し難い「女」つながりで、七四段↓七三段↓六九段と廻り得るにすぎないのである。従って、彼女に六九段との直結感を見出そうとするなら「注27」、隲化Ⅱ一般化がなされた七三段というフィルターをとおして、六九段の斎宮との同一視Ⅱ限定を試みるくらいしかない。「女」には何の情報も付されおらず、これでは、彼女からわかる六九段との直結感は、当然、ほぼ皆無になってしまふ。斎宮章段群は、最後の七四段で、六九段との直結感をほぼ皆無にする究極的隲化Ⅱ一般化がなされ、そして、締め括られるわけである。

七三段の〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉Ⅱ婉曲的表現方法を、七四段もまた踏襲Ⅱ遵守している。前段における隲化Ⅱ一般化の上にまた隲化Ⅱ一般化あるいは隲化を重ね、七三段で甚だ弱かった六九段との直結感は、斎宮章段群最後の七四段で、遂に、ほぼ皆無といったところまでくるのである。

七〇〜七四段は、一見雑多な類話的章段の雑然とした連なりに見える。しかし、雑多なものを雑然と連ねただけであれば、七一一七四段に、これほどまでに規則的な〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉とその踏襲を見られたであろうか。編作者は「斎宮」の語をいくらでも用いて統一感を付与できたはずなのに「注28」、それをしなかったのは、〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉とその

踏襲が念頭にあったからと考えられる（六九段との直結感をほぼ皆無にする究極的隲化Ⅱ一般化がなされる七四段で斎宮章段群が終わるのも、極め尽くしたゆえにそこで終わったものと思われる「注29」）。七〇段と七一段、七一段と七二段、七二段と七三段、七三段と七四段を比較していくと、そこに驚くべき規則性があることに気づく。七一段における〈基幹章段との直結感を弱める隲化あるいは一般化〉Ⅱ婉曲的表現方法と、七二〜七四段におけるその踏襲Ⅱ遵守。今まで気づかなかつたこの婉曲的側面は、今後「伊勢」を統一体として読むことの必要性を説く上では欠かせない例となる。

注23 「狩の使」も「内の御使」に含まれるが、より具体的である。なお、「狩の使」については、たとえば秋山虔『新大系』が、次のように述べている。

平安時代の初期、勅使を諸国に派遣して鷹狩をさせ、朝廷の宴會等の用に供した。五位の藏人が任ぜられたことが多く、狩にことよせて地方の治政をも査察させたものらしい。

24 斎宮とらない注釈書もあり、たとえば、上坂信男「評解」は単なる在地の者とする、森本茂「全釈・秋山『新大系』・鈴木「評解」は斎宮に仕える女房とする。けれども、それらの説は採らない。

25 注5で触れたとおり、渡辺「集成」は、この段の追加は七十段におくられるのだらう。歌の「大淀」も七十段の「大淀のわたり」で説明すみのつもりであろう。

26 と指摘しており、領ける。
渡辺「集成」・竹岡正夫「全評釈」・秋山「新大系」・永井和子「笠間文庫」などがそうで、上坂「評解」も、斎宮を暗示するよう

と見ながら、

「月やあらぬ」と嘆いた二条后への恋にも通じる。
と述べている。

27 斎宮章段群内の「女」であることを考え併せて斎宮と取る点は、七二・七三段の「女」と同様である（渡辺『集成』の「背後に六十九段がひかえているゆえに、この短い説明で十分とされ得た」という指摘も、首肯できる）。

28 歌後部に「斎宮」の語を注記する章段として、一〇二・一〇四段がある。それは定家本『伊勢』の場合であるが、広本『伊勢』のなかにも、両段に同様の注記をもつものがある。なお、塗籠本『伊勢』は、両段にそれをもたない。もつもの↓もたないものなのか、もたないもの↓もつものなのかは、判断を保留する。

29 つづく七五段には「伊勢の国」「大淀」の語があり、離化Ⅱ一般化を重ねてきたこれまでの流れに「見逆行するかに見えるが、注4で述べたとおり、昔男が都女に伊勢移住をもち掛けて拒まれる七五段は、斎宮章段群に含めなくていい。とすれば、〈基幹章段との直結感を弱める離化あるいは一般化〉の踏襲とは無縁なわけで、「伊勢の国」「大淀」の語があってもかまわないと考えられる。

V 〈裏返し表現で推測させる暗号化〉とその踏襲

一〇三段をとりあげる本節で導入するのは、塗籠本『伊勢』に見る一次本文↓広本『伊勢』に見る二次本文↓定家本『伊勢』に見る三次本文、という時間軸である。

まずは、定家本『伊勢』一〇三段、および、それに対応する塗籠本『伊勢』99段・広本『伊勢』106段の本文を比較し、一次本文↓二次本文↓三次本文における年輪のごとき加筆過

程を把握しておく。なお、塗籠本『伊勢』は南波浩『日本古典全書』（底本は伝民部卿局筆本）、広本『伊勢』は片桐編『異本対照 伊勢物語』昭56・1和泉書院（底本は阿波国文庫旧蔵本）により、読みやすさと比較しやすさを考慮して表記を改め、傍線も付す。塗籠本『伊勢』は、次のとおり。

昔、男ありけり。深草の帝に仕うまつりけり。その男、あだなる心なかりけり。心誤りやしたりけむ、親王たちの召し使ひ給ひける人を、あひ知りにけり。さて、朝に言ひやる。

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなくも
なりまさるかな

つづいて、広本『伊勢』。

昔、男ありけり。その男、いとまめにて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。さのごとくして仕う給ひける頃、心誤りやしたりけむ、親王たちの使ひ給ひけるを、逢ひ侍りけり。さて、朝に詠みてやれりける。

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなくも
なりまさるかな

塗籠本『伊勢』にもあった太い傍線部Aに、細い傍線部Bが加筆されている。そして、定家本『伊勢』。

昔、男ありけり。その男、いとまめに、実用にて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむ仕うまつりける。心

誤りやしたりけむ、親王たちの使ひ給ひけるを、あひ言へりけり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

となむ詠みてやりける。さる歌の汚げさよ。

塗籠本・広本『伊勢』にもあった太い傍線部Aと広本『伊勢』にもあった細い傍線部Bに、波線の傍線部Cと歌後の点線の傍線部Dが加筆されている〔注30〕。

まとめると、歌前部の傍線部に関しては、Aのみの塗籠本『伊勢』↓A+Bの広本『伊勢』↓A+B+Cの定家本『伊勢』となり、これは、一次本文↓二次本文の段階でAにBが加筆され、二次本文↓三次本文の段階でA・BにCが加筆されたことを意味しよう。歌後の傍線部を加えれば、Aのみの塗籠本『伊勢』⇨一次本文↓A+Bの広本『伊勢』⇨二次本文↓A+B+C+Dの定家本『伊勢』⇨三次本文、とまとめられる。

では、この一次本文↓二次本文↓三次本文という不可逆的時間軸に沿って、〈裏返し表現で推測させる暗号化〉の有無を見定めていく。二次本文の頃までは、〈裏返し表現で推測させる暗号化〉はなかったであろう。一次本文は、「あだなる心な」き昔男なのに「心誤り」してしまった、と額面どおりにとれるし、二次本文で「あだなる心なかりけり」に「いとまめにて」が加筆されても、まだ額面どおりにとれる。し

かし、「いとまめ」「実用」「あだなる心なかりけり」と三重に重ねる三次本文ともなると、さすがに大袈裟で、実際は「あだ」なを裏返しした白々しい表現ではないかと思えてくる（上坂「評解」が「大袈裟」な「裏返し」の表現を作者は楽しんで「いる」と指摘し、拙著『相補論』二三三頁では「白々しい表現」と指摘した）。しかも、歌後部に加筆される「さる歌の汚げさよ」はスレた昔男像を想像させ、本当は「あだ」である印象を強める〔注31〕。三次本文の「いとまめに、実用にて、あだなる心なかりけり」は、〈裏返し表現で推測させる暗号化〉と見ていい。

そして、その一〇三段の〈裏返し表現で推測させる暗号化〉は、前後章段⇨一〇二・一〇四段の〈裏返し表現で推測させる暗号化〉を踏襲したものと思われる（定家本『伊勢』一〇二⇨一〇四段と対応するのは塗籠本『伊勢』98⇨100段および広本『伊勢』105⇨107段であり、前後章段という言葉は塗籠本・広本・定家本『伊勢』全てに適用できる）。

前後章段の本文を、定家本『伊勢』で代表して示そう。前に位置する一〇二段は、次のとおり。

昔、男ありけり。歌は詠まざりけれど、世のなかを思ひ知りたりけり。あてなる女の尼になりて、世のなかを思ひ倦んじて、京にもあらず、はるかなる山里に住みけり。もと親族なりければ、詠みてやりける。

そむくとして雲には乗らぬものなれど世の憂きことぞ

よそになるてふ

となむ言ひやりける。斎宮の宮なり。

後に位置する一〇四段は、次のとおり。

昔、ことなることなくて尼になれる人ありけり。かたちをやつしたれど、ものやゆかしかりけむ、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌詠みてやる。

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよとも頼まるるか

これは、斎宮のものの見給ひける車にかく聞こえたりければ、見さして帰り給ひにけりとなむ。

注目すべきは、ゴチックにした一〇二段「歌は詠まざりけれど」と一〇四段「ことなることなくて尼になれる」である（塗籠本・広本『伊勢』の前後章段にも同様にある）。「歌は詠まざりけれど」が〈裏返し表現で推測させる暗号化〉であることは、言うまでもない。昔男が第一級歌人なのは、これまでの章段で詠んできた多くの歌から疑いないし、昔男のモデルが在原業平ということからも明らかである。「ことなることなくて尼になれる」については、昔男が「世をうみのあま（世を憂み出家した尼）」とし人を見るからに」と詠むところから、「ことなることなくて尼にな」ったわけではないとわかる。ゆえに、「ことなることなくて尼になれる」も、〈裏返し表現で推測させる暗号化〉ということになる。加えて、一〇二段の「尼」と同一人物ととれば、一〇二段「世のなか

を思ひ倦んじて」を理由として、やはり、それと矛盾する「ことなることなくて尼になれる」が〈裏返し表現で推測させる暗号化〉ということになる（実際は「思い倦んじて」すなわち「ことなること」があつて「尼にな」った、ととる）。前後章段の「歌は詠まざりけれど」「ことなることなくて尼になれる」は、一〇三段「いとまめに、実用にて、あだなる心なかりけり」と同じく、〈裏返し表現で推測させる暗号化〉と考えられる。

そして、一〇三段とその前後章段に〈裏返し表現で推測させる暗号化〉が見られるとなれば、三次本文における〈裏返し表現で推測させる暗号化〉の三連続が成り立つ（図示すれば●●●）。「注32」。一二次本文の頃は、前後章段のみに〈裏返し表現で推測させる暗号化〉が見られ、まだ三連続になつていなかったから（図示すれば●○○）、三次本文の頃になつて、前後章段の〈裏返し表現で推測させる暗号化〉がまんなかの一〇三段に踏襲されたことになる。つまり、婉曲的表現方法とその遵守である。塗籠本『伊勢』98〜100段広本『伊勢』105〜107段と定家本『伊勢』一〇二〜一〇四段の比較によって、言い換えれば、●●●の一二次本文と●●●の三次本文の比較によって、書写者兼編作者による婉曲的表現方法とその遵守が垣間見えてくるわけで「注33」、これほどまでの婉曲的側面が認められることに、私は、驚きをおぼえる。と同時に、『伊勢』を統一体として読むことの必要性を思うのである。

注30

広本『伊勢』のなかにもC・DあるいはCの情報をもつものがあ
るが、それら以外はC・Dの情報をもたない。よって、広本『伊勢』
にはC・Dの情報がないものと見ておく。

31

拙著『相補論』二二三頁では、次のように述べた。

歌後部「さる歌のきたげさよ」もスレた感じがする。こうし
たふざけた表現は、不道德な内容ともマッチしている。
実は、一〇一段にも、
32

もとより歌のことは知らざりければ

とある。昔男が「歌のこと」を「知ら」ないはずはなく、これも一
〇二段「歌は詠まざりけれど」と同様の〈裏返し表現で推測させる
暗号化〉と言えるから、正確には、三連続ではなく、四連続となる
(図示すれば●●●●)。ちなみに、定家本『伊勢』ではそのように
一〇一・一〇二段と連続するものの、注5にあげた福井『生成論』
五〇三頁を見ると、泉州本以外の広本『伊勢』では一〇一・一〇二
段に対応する章段は連続せず、塗籠本『伊勢』には一〇一段に対応
する章段がない。この比較からも、三次本文における〈裏返し表現
で推測させる暗号化〉の四連続には、明確な意図を感じる。
一〇一・一〇二段の連続する段序が原初的か後世的かの判断は保留
するが、とにかく、一〇一・一〇二段の●●●●が、一〇四段の●と
ともに、一〇三段の●化と関係している点は、動かないであろう。

33

本節では書写者兼編作者による婉曲的表現方法とその遵守を確認
してきたが、もちろん、書写者兼編作者が婉曲的とは逆の説明の方
向に進むケースも考えねばならない。たとえば、もとは〈人物の明
確な紹介を避ける臃化〉が見られた歌前部暗示型を歌後部注記型あ
るいは歌前部明示型にし、その人物が誰なのか説明するケースがそ
うで、広本『伊勢』の書写者兼編作者による注3のケースや塗籠本
『伊勢』の書写者兼編作者による注14のケースが、該当すると思わ
れる。

VI 結び

平25・10の中古文学会で前稿の内容を口頭発表した際、私
は、その質疑応答において、『伊勢』の婉曲的表現方法を、
継ぎ足しながら代々継承していく鰻屋のタレに譬えた。Ⅲ節
以降で見てきたとおり、『伊勢』も、婉曲的表現方法という
老舗の味を継承している(継承という言葉は、本稿で多用し
た踏襲あるいは遵守といった言葉に相当する)。研究者たち
は、『伊勢』の成立過程後期に携わった人々に対し、雑多な
章段を雑然と連ねたくらいに考え、その仕事を軽視している
ように感じられるが、今後は、そうした態度を改めねばなら
ないのではなからうか。前稿につづく本稿によって、統一
『伊勢』のさらなる婉曲的側面を種々明らかにし得たと思う。
ならば、『伊勢』を統一体として読むことの必要性を考えな
いわけにはいかないのではないか。本稿がそうした必要性を
周知する一助となれば、誠に幸いであるし、『伊勢』を統一
体として読む試みとして既にある拙著『相補論』一一五・
二七八頁に少しでも目が向けば、望外の喜びである。

付記

本稿は、平26・3の名古屋平安文学研究会における
口頭発表にもとづいている。ご教示賜わった諸氏に、
厚く御礼申しあげる。

(たぐち・ひさゆき 本学教授)